



インストールガイド

Sun Java™ Studio Enterprise 8.1

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 820-0147-10
2006 年 12 月, Revision A

コメントの送付: <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2006 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements. Use is subject to license terms.

この製品には第三者によって開発された成果物が含まれている場合があります。フォントテクノロジーを含むサードパーティ製のソフトウェアの著作権およびライセンスは、Sun Microsystems, Inc. のサプライヤーが保有しています。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴ、Solaris のロゴ、Java Coffee Cup のロゴ、docs.sun.com、Java、および Solaris は、米国および他の各国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンス規定に従って使用されており、米国および他の各国における SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。SPARC の商標を持つ製品は、Sun Microsystems, Inc. によって開発されたアーキテクチャに基づいています。

UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品はライセンス規定に従って配布され、本製品の使用、コピー、配布、逆コンパイルには制限があります。本製品のいかなる部分も、その形態および方法を問わず、Sun Microsystems, Inc. およびそのライセンサーの事前の書面による許可なく複製することを禁じます。

本製品は、米国輸出管理法の対象となっています。また、他国においても輸出入管理法の対象となっている場合があります。お客様は、それらのすべての法令および規制を厳守することに同意し、納品後に輸出、再輸出、または輸入の許可が必要となった場合には、お客様にそれらを取得する責任があるものとします。本製品を米国輸出規制法に指定されている各国または団体に提供することを禁じます。お客様は、本ソフトウェアが、核施設的设计、建設、運転または保守で使用するように設計、ライセンス、および意図されていないことを認識するものとします。Sun Microsystems, Inc. は、そのような目的の適合性に関して、明示的、黙示的を問わずいかなる保証も致しません。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含み、明示的であるか黙示的であるかを問わず、あらゆる説明および保証は、法的に無効である限り、拒否されるものとします。

原典:	<i>Sun Java Studio Enterprise 8.1 Installation Guide</i>
	Part No: 819-8012-10
	Revision A



Please
Recycle



Adobe PostScript

目次

- はじめに v
- 書体と記号について vi
- 関連マニュアル vii
- Sun の技術サポート viii
- コメントをお寄せください viii

- 1. Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールの準備 1
 - システム要件 1
 - 必要なソフトウェア 2
 - インストールの制限事項 2
 - 同一システム上での Java Studio Enterprise の異なるバージョンの実行 3

- 2. Microsoft Windows: Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールと起動方法 5
 - 開始する前に 5
 - Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール 6
 - IDE の起動 12

- 3. Solaris OS および Linux: Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールと起動方法 13
 - 開始する前に 13
 - Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール 15

IDE の起動 21

4. Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ 23
 5. 起動コマンド行オプションの使用 25
 6. Java Studio Enterprise ソフトウェアのアンインストール 27
 - Microsoft Windows プラットフォームでのアンインストール 27
 - Solaris OS と Linux プラットフォームでのアンインストール 28
 7. サイレントモードでのJava Studio Enterprise ソフトウェアのインストール 29
 - サイレントモードの使用に関する注意事項 29
 - 状態ファイルの作成 30
 - サイレントモードでのインストーラの実行 32
 8. コラボレーション実行環境の使用 35
 - コラボレーション実行環境の起動 35
 - コラボレーション実行環境サービスの構成 (Microsoft Windows) 36
 - コラボレーションのログオプションの変更 37
 - コラボレーション実行環境の停止 38
 - コラボレーション実行環境ポートの確認と変更 38
- 索引 41

はじめに

Sun Java™ Studio Enterprise 8.1 ソフトウェアには、次のものが含まれています。

- Sun Java Studio Enterprise 8.1 統合開発環境 (IDE)
- Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition
- Sun Java Studio Enterprise 8.1 コラボレーション実行環境

このマニュアルでは、Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール、設定、起動方法を説明しています。このマニュアルは、このソフトウェアをインストールするシステム管理者および開発者の両方を対象に用意されています。

Java Studio Enterprise ソフトウェアで使用するプラットフォームへのソフトウェア製品のインストールおよびアンインストール方法をよく理解しておいてください。

Java Studio Enterprise IDE を正しく使用するには、次のリソースで説明されているような J2EE の概念に関する知識が必要です。

- Java 2 Platform, Enterprise Edition Blueprints
<http://java.sun.com/blueprints/enterprise/index.html>
- Java 2 Platform, Enterprise Edition Specification
<http://java.sun.com/javaee/downloads/previous/>
- J2EE Tutorial
<http://java.sun.com/j2ee/1.4/docs/#tutorials>
- Java Servlet Specification Version 2.3
<http://java.sun.com/products/servlet/download.html#specs>
- JavaServer Pages Specification Version 1.2
<http://java.sun.com/products/jsp/reference/api/index.html>

XML ベースの RPC (JAX-RPC) の Java API の知識があると役立ちます。詳細については、次の Web ページを参照してください。

<http://java.sun.com/webservices/jaxrpc/index.jsp>

注 – Sun では、本マニュアルに掲載されている第三者の Web サイトのご利用にしましては責任はなく、保証するものでもありません。また、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関しても一切の責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイトから利用可能であるコンテンツ、製品、サービスの利用あるいはそれらのものを信頼することによって、あるいはそれに関連して発生するいかなる損害、損失、申し立てに対する一切の責任を負いません。

書体と記号について

書体または記号 ¹	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
AaBbCc123	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING `

¹ 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

関連マニュアル

Java Studio Enterprise のマニュアルとしては、Acrobat Reader (PDF) 形式のマニュアル、HTML 形式のリリースノート、オンラインヘルプ、チュートリアルが提供されています。

オンラインで入手可能なマニュアル

ここで紹介しているマニュアルは、docs.sun.comSM Web サイト (<http://docs.sun.com>) および技術情報ポータルサイト (SDC) の Sun Java Studio Enterprise のページ (<http://sdc.sun.co.jp/javatools/jsenterprise/index.html>) から入手できます。

- Sun Java Studio Enterprise 8.1 リリースノート
最新のリリースの変更点や技術的な注意事項を説明しています。
- Sun Java Studio Enterprise 8.1 インストールガイド
このマニュアルです。

チュートリアル

Sun Java Studio Enterprise 8.1 には、IDE の機能を理解する手助けとなるチュートリアルがいくつか用意されています。これらのチュートリアルにある技術、およびコード例は、そのまま、または編集を加えて、実際のアプリケーションの開発に利用することができます。

チュートリアルは、すべて開発者向けネットワーク (SDN) ポータルサイトから入手できます。アクセスするには「ヘルプ」→「チュートリアル」を選択するか、または「ようこそ」ページで「チュートリアル」の下にあるリンクをクリックします。

オンラインヘルプ

Sun Java Studio Enterprise 8.1 IDE には、オンラインヘルプが用意されています。ヘルプは、Microsoft Windows 環境では F1 キー、Solaris オペレーティング環境では Help キーを押すか、「ヘルプ」→「ヘルプの目次」を選択して開くことができます。ヘルプの項目と検索機能が表示されます。

アクセシブルな製品マニュアル

マニュアルは、技術的な補足をすることで、ご不自由なユーザーの方々にとって読みやすい形式のマニュアルを提供しております。アクセシブルなマニュアルは以下の表に示す場所から参照することができます。

マニュアルの種類	アクセシブルな形式と格納場所
マニュアル	形式: HTML 場所: http://docs.sun.com
チュートリアル	形式: HTML 場所: Sun Developer Network ポータルサイト http://developers.sun.com/jsenterprise
リリースノート	形式: HTML 場所: http://docs.sun.com

Sun の技術サポート

このマニュアルに記載されていない技術的な問い合わせについては、次の URL へ進んでください。

<http://jp.sun.com/service/contacting>

コメントをお寄せください

マニュアルの品質改善のため、お客様からのご意見およびご要望をお待ちしております。コメントは下記よりお送りください。

docfeedback@sun.com

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルと Part No. を記載してください。
『Sun Java Studio Enterprise 8.1 インストールガイド』、Part No. 820-0147-10

第1章

Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールの準備

Java™ Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする前に、この章に示す情報をお読みください。

この章は、次の節で構成されています。

- 1 ページの「システム要件」
- 2 ページの「必要なソフトウェア」
- 2 ページの「インストールの制限事項」
- 3 ページの「同一システム上での Java Studio Enterprise の異なるバージョンの実行」

システム要件

Java Studio Enterprise ソフトウェアを正常にインストールするためには、システム要件を満たしている必要があります。

Sun Java Studio Enterprise 8.1 は次のオペレーティングシステムで使用できます。

- Microsoft Windows XP Professional Edition SP2
- Solaris 10 オペレーティングシステム (Solaris OS)
- Solaris 9 オペレーティングシステム (Solaris OS) Update 7
- Red Hat Fedora Core 3 (Linux OS)

システム要件の詳細については、『Sun Java Studio Enterprise 8.1 リリースノート』を参照してください。

<http://developers.sun.com/prodtech/javatools/jsenterprise/reference/docs/index.jsp>

必要なソフトウェア

Sun Java Studio Enterprise 8.1 を使用するには、システムに Java 2 Platform Standard Edition Development Kit (JDK) 5.0 Update 1 以上のバージョンが必要です。

注 – Version 5.0 Update 1 は JDK アップデトリリースの外部向けの番号です。内部向けのバージョン番号は、1.5.0_01 です。

JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンを持っていない場合は、次の場所から、ご使用のプラットフォーム用の JDK version 5.0 の最新版をダウンロード、インストールしてください。

<http://java.sun.com/javase/downloads/index.html>

使用可能なバージョンについては、<http://java.sun.com/j2se/> を参照してください。

システムに JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがある場合は、それを選択して Java Studio Enterprise ソフトウェアのこのインストールに使用することができます。

注 – JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがない場合は、Sun Java Studio Enterprise 8.1 のインストールは実行されません。



注意 – Java Studio Enterprise ソフトウェアのこのリリースは、Java SE Development Kit (JDK) 6 をサポートしていません。詳細については、『Sun Java Studio Enterprise 8.1 リリースノート』を参照してください。

インストールの制限事項

- すべてのプラットフォームについて、IDE のインストールディレクトリは空でなければなりません。また、インストーラを実行するユーザーには、そのディレクトリへの書き込み権限が必要です。
- Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition のインストールディレクトリでは、そのパス名に空白文字または特殊記号が含まれないようにしてください。

- ファイアウォールアプリケーションを起動しているプラットフォームがあると、インストールプロセスでいくつかのコンポーネントの設定が正しく行われない場合があります。したがって、インストールを開始する前に、すべてのファイアウォールアプリケーションを停止してください。

同一システム上での Java Studio Enterprise の異なるバージョンの実行

Java Studio Enterprise 8.1 は、同じシステム上で Java Studio Enterprise 8 と共存できます。Java Studio Enterprise 8.1 をインストールして実行するのに Java Studio Enterprise 8 をアンインストールする必要はありません。

コラボレーション実行環境

デフォルトでは、コラボレーション実行環境はポート番号 5222 を使用する設定です。Java Studio Enterprise 8 コラボレーション実行環境をインストールして、同時に両方のインストールを使用する場合は、IDE のインストールを開始する前に Java Studio Enterprise 8 コラボレーション実行環境が起動していることを確認してください。Java Studio Enterprise 8 コラボレーション実行環境を起動すると、インストーラがポート番号 5222 が使用されていることを検出します。この場合、インストーラはコラボレーション実行環境に、ほかの利用可能なポート番号を割り当てます。

第2章

Microsoft Windows: Java Studio Enterprise ソフトウェア のインストールと起動方法

この章では、物理メディア (DVD) から、または Web サイトからファイルをダウンロードして、Java Studio Enterprise ソフトウェアを Microsoft Windows プラットフォームにインストールする方法を説明します。

この章は、次の節で構成されています。

- 5 ページの「開始する前に」
 - 6 ページの「Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール」
 - 12 ページの「IDE の起動」
-

注 – 類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise をインストールする場合、サイレントインストールを行うことができます。サイレントインストールの準備と実行の詳細は、29 ページの「サイレントモードでの Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール」を参照してください。

開始する前に

Microsoft Windows プラットフォームでは次の制限事項が適用されます。

- システムに、JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがインストールされていなければなりません。JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、インストールプロセスを実行できません。

JDK のバージョンについての詳細は、2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。

- インストールを開始する前に、すべてのファイアウォールアプリケーションを停止します。

ファイアウォールアプリケーションを起動していると、インストールプロセスでいくつかのコンポーネントの設定が正しく行われません。

- **Java Studio Enterprise** インストーラは、まず、TEMP 環境変数に定義されている、デフォルトの一時ディレクトリに必要なファイルを抽出します。一時ディレクトリのディスクの総容量が必要な容量を下回っていると、インストールに失敗したり、正しくインストールされない場合があります。

この問題が発生した場合は、TEMP 環境変数で割り当てられているディレクトリの容量を増やすか、十分に空き容量がある別の一時ディレクトリを指定してください。あるいは、インストーラがエラーメッセージを記録するインストールログファイルを作成します。

手順については、このあとの 6 ページの「インストールログファイルの生成」および 6 ページの「インストール用の一時ディレクトリの指定」を参照してください。

インストールログファイルの生成

インストール情報を含むログファイルを作成する場合は、次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトウィンドウからインストールのプロセスを開始してください。

```
C:\>cd location-of-installer  
C:\location-of-installer>jstudio_ent81-ml-windows.exe -is:log log-file-name
```

インストール用の一時ディレクトリの指定

別の一時ディレクトリを指定する場合は、次のコマンドを使用してコマンドプロンプトウィンドウからインストーラを起動する必要があります。

```
C:\>cd location-of-installer  
C:\location-of-installer>jstudio_ent81-ml-windows.exe -is:tempdir  
temporary-directory
```

Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール

Java Studio Enterprise は、メディアまたはダウンロードしたファイルからインストールすることができます。

▼ インストールを開始する

1. システムに管理者 (administrator) 権限でログインし、すべてのファイアウォールアプリケーションを停止します。

ファイアウォールアプリケーションを起動していると、インストールプロセスでいくつかのコンポーネントの設定が正しく行われません。

2. メディアからインストールするには、メディアをメディアドライブに挿入します。
インストーラが起動しない場合は、メディアの最上位階層にある README ファイルに示されている場所へ移動して、インストーラファイルをダブルクリックします。
3. ダウンロードしたファイルからインストールを実行するには、次の手順に従います。
 - a. Java Studio Enterprise のインストーラファイル (*download-installer*) を、書き込み可能なフォルダにダウンロードします。

ダウンロードを正しく行うために、Sun™ Download Manager ソフトウェア (<http://www.sun.com/download/sdm/>) を使用してください。

注 – ダウンロードが完了したら、ダウンロードファイルを確認します。ダウンロードフォルダで、ダウンロードしたファイルがダウンロードページに表示されているものと同じサイズであることを確認します。ファイルサイズが一致しない場合、そのファイルはダウンロード中に壊れた可能性があります。この場合、再度ダウンロードを行なってください。

- b. ダウンロードフォルダで、*download-installer* ファイルをダブルクリックします。
4. インストールウィザードの「ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
 5. ライセンス許諾契約に同意して、「次へ」をクリックします。
 6. 「インストールの種類」ページでは、次のいずれかを行います。

- 付属の Application Server をインストールする場合は、次の表を使用して、該当する選択と手順を実行します。

インストール対象	行うこと
すべてのコンポーネント	<ol style="list-style-type: none">1. 「標準」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。2. 「インストールディレクトリ」ページで、9ページの「付属の Application Server を含めたインストールを続行する」の手順に従います。
IDE と付属の Application Server (コラボレーション実行環境はインストールしない)	<ol style="list-style-type: none">1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。2. 「コンポーネントの選択」ページで、「コラボレーション実行環境」チェックボックスを選択解除します。3. 「次へ」をクリックします。4. 「インストールディレクトリ」ページで、9ページの「付属の Application Server を含めたインストールを続行する」の手順に従います。

- システムに、Java Studio Enterprise のこのインストールとともに使用する Sun Java™ System Application Server 8.2 Platform Edition がある場合は、次の表を使用して、該当する選択と手順を実行します。

インストール対象	行うこと
IDE とコラボレーション実行環境	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。 2. 「コンポーネントの選択」ページで、「Sun Java System Application Server 8.2 PE」チェックボックスを選択解除します。 3. 「次へ」をクリックします。 4. 「インストールディレクトリ」ページで、10ページの「インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する」の手順に従います。
IDE	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。 2. 「コンポーネントの選択」ページで、「Sun Java System Application Server 8.2 PE」および「コラボレーション実行環境」チェックボックスを選択解除します。 3. 「次へ」をクリックします。 4. 「インストールディレクトリ」ページで、10ページの「インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する」の手順に従います。

▼ 付属の Application Server を含めたインストールを続行する

1. インストールウィザードの「インストールディレクトリ」ページで、IDE および Application Server のデフォルトインストールディレクトリを受け入れるか、別のディレクトリを指定して「次へ」をクリックします。

注 – 指定するインストールディレクトリは、空でなければなりません。指定したディレクトリが存在しない場合は、インストール中に作成されます。選択したディレクトリに対する書き込み権限を持つようにしてください。

Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition のインストールディレクトリでは、そのパス名に空白文字または特殊記号（「!」や「#」など）を含めることはできません。

2. 互換性のある JDK の自動検出に失敗する場合は、Java Studio Enterprise のこのインストールに使用する JDK を指定して、「次へ」をクリックします。

注 – JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、現在のインストールを取り消し、必要なバージョンの JDK をインストールしてください。2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。

3. Application Server のインストール用の admin ユーザー名とパスワードを定義するか、デフォルトを受け入れて、「次へ」をクリックします。

admin ユーザー名は英数字でなければなりません。パスワードは、最低 8 文字の長さであるべきです。デフォルトの名前は admin、パスワードは adminadmin です。

4. (省略可能) Application Server のデフォルトポート値を確認して、必要な場合は変更します。そのあと、「次へ」をクリックします。

このページは、インストールの種類として「カスタム」を選択した場合にだけ表示されます (たとえば、IDE と付属の Application Server をインストールし、コラボレーション実行環境はインストールしないというような場合)。

「標準」インストールの場合は、インストーラは自動的に Application Server のポートを検証し、ユーザーの操作は何も要求しません。

5. 11 ページの「インストールを完了する」の指示に従って、インストールを完了します。

▼ インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する

1. インストールウィザードの「インストールディレクトリ」ページで、IDE のデフォルトインストールディレクトリを受け入れるか、別のディレクトリを指定して「次へ」をクリックします。

注 – 指定するインストールディレクトリは、空でなければなりません。指定したディレクトリが存在しない場合は、インストール中に作成されます。選択したディレクトリに対する書き込み権限を持つようにしてください。

2. 互換性のある JDK の一覧から、Java Studio Enterprise のこのインストールで使用する JDK を指定し、「次へ」をクリックします。

注 – JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、現在のインストールを取り消し、先に必要なバージョンの JDK をインストールしてください。2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。

3. 互換性のあるインストールのリストからインストール済みの Application Server を選択するか、「ブラウズ」をクリックして場所を指定し、「次へ」をクリックします。
インストール済みの Application Server を選択しないで先へ進むと、Java Studio Enterprise IDE は、この Application Server インストールを使用するための設定を行いません。インストール済みの Application Server 用に手動で IDE を設定する必要があります。
4. (省略可能) コラボレーション実行環境の設定ページで、コラボレーション実行環境用のポート値、サービス名、インスタンス名を指定するか、デフォルト値を受け入れません。
このページは、コラボレーション実行環境のインストールを選択した場合にだけ表示されます。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 11 ページの「インストールを完了する」の指示に従って、インストールを完了します。

▼ インストールを完了する

1. 現在の設定が正しいこと、システムに十分な空き容量があることを確認します。
2. 「インストール」をクリックし、インストールを開始します。
3. インストールが完了したあとに IDE を起動するには、「Java Studio Enterprise IDE を起動」チェックボックスを選択します。
4. 「完了」をクリックします。

インストールプログラムはインストール情報のログファイルを作成します。デフォルトでは、このログファイルは、次のディレクトリに保存されています。

```
%SystemDrive%\Documents and Settings\user-ID\Local Settings\Temp\jstudio_ent81-installation-timestamp.random-number.log
```

例: C:\Documents and Settings\myUserName\Local Settings\Temp\jstudio_ent81-installation-20060227130933.12558.log

6 ページの「インストールログファイルの生成」の手順に従うと、ログファイルは、インストールの前に指定した場所にも保存されます。

5. ファイアウォールアプリケーションを停止している場合は、有効にします。

注 – Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition またはコラボレーション実行環境をインストールしている場合は、サーバーのポート番号などの設定情報を次のファイルで確認できます。

```
java-studio-install-dir\configuration-data.txt
```

IDE の起動

インストーラウィザードの最後のページから IDE を起動していない場合、この章で説明している方法のいずれかを使用して IDE を起動することができます。

▼ IDE を起動する

- デスクトップにある「Java Studio Enterprise 8.1」アイコンをダブルクリックします。
- 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 8.1」->「Java Studio Enterprise IDE」->「IDE を起動」を選択します。

▼ コマンドプロンプトで IDE を起動する

1. IDE の実行可能ファイルがあるフォルダに移動します。

例:

```
> cd java-studio-install-dir\ide\bin
```

2. デスクトップアイコンが使用しているデフォルトの起動ツールを使用して IDE を起動する場合は、`jstudiow.exe` コマンドを使用します。

または次のようにします。

IDE を起動してコマンドプロンプトウィンドウにメッセージを表示する場合は、`jstudio.exe` コマンドを入力します。

実行用のコマンドオプションは、コマンドプロンプトか `java-studio-install-dir\ide\etc\jstudio.conf` ファイルで指定することができます。25 ページの「起動コマンド行オプションの使用」を参照してください。

第3章

Solaris OS および Linux: Java Studio Enterprise ソフトウェア のインストールと起動方法

この章では、物理メディア (DVD) から、または Web サイトからファイルをダウンロードして、Java Studio Enterprise ソフトウェアを Solaris OS および Linux 環境にインストールする方法を説明します。

この章は、次の節で構成されています。

- 13 ページの「開始する前に」
- 15 ページの「Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール」
- 21 ページの「IDE の起動」

注 – 類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise をインストールする場合、サイレントインストールを行うことができます。サイレントインストールの準備と実行の詳細は、29 ページの「サイレントモードでの Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール」を参照してください。

開始する前に

Solaris OS および Linux 環境では、次の制限事項が適用されます。

- システムに、JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがインストールされていなければなりません。JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、インストールプロセスを実行できません。詳細については、2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。
- Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition のインストールディレクトリでは、そのパス名に空白文字または特殊記号 (「!」や「#」など) を含めることはできません。

- Java Studio Enterprise インストーラは、まず、TEMP 環境変数に定義されている、デフォルトの一時ディレクトリにファイルを抽出します。一時ディレクトリのディスクの総容量が必要な容量を下回っていると、インストールに失敗したり、正しくインストールされない場合があります。

この問題が発生した場合は、TEMP 環境変数で割り当てられているディレクトリの容量を増やすか、十分に空き容量がある別の一時ディレクトリを指定してください。あるいは、インストーラがエラーメッセージを記録するインストールログファイルを作成します。手順については、このあとの 14 ページの「インストールログファイルの生成」および 14 ページの「インストール用の一時ディレクトリの指定」を参照してください。

インストールログファイルの生成

インストール情報を含むログファイルを作成する場合は、次のコマンドを使用して、端末ウィンドウからインストールのプロセスを開始してください。

```
% cd /location-of-installer  
% ./installer -is:log log-file-name
```

installer を次のいずれかに置き換えてください。

- Solaris OS SPARC プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-solaris-sparc.sh`
- Solaris OSx86 プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh`
- Linux プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-linux.sh`

インストール用の一時ディレクトリの指定

別の一時ディレクトリを指定する場合は、次のコマンドを使用して端末ウィンドウからインストーラを起動する必要があります。

```
% cd /location-of-installer  
% ./installer -is:tempdir temporary-directory
```

installer を次のいずれかに置き換えてください。

- Solaris OS SPARC プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-solaris-sparc.sh`
- Solaris OSx86 プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh`
- Linux プラットフォーム: `jstudio_ent81-ml-linux.sh`

Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール

Java Studio Enterprise は、メディアまたはダウンロードしたファイルからインストールすることができます。

▼ インストールを開始する

1. システムに管理者権限でログインし、すべてのファイアウォールアプリケーションを停止します。

ファイアウォールアプリケーションを起動していると、インストールプロセスでいくつかのコンポーネントの設定が正しく行われません。

注 – Linux プラットフォームでは、Java Studio Enterprise ソフトウェアは、管理者権限でログインしなくてもインストールできます。

2. メディアからインストールするには、メディアをメディアドライブに挿入します。

インストーラが起動しない場合は、端末ウィンドウを開いて次のコマンドを使用してインストールします。

```
% cd /media-drive/volume-label
% ./installer
```

installer は、インストーラのファイル名に置き換えてください。インストーラのファイルの場所は、メディアの最上位階層にある README ファイルに示されています。

注 – Solaris OS では、自動実行スクリプトはデフォルトでは無効です。インストーラを起動するには、メディアの製品のフォルダに移動し、ファイルブラウザでインストーラファイルをダブルクリックします。

3. ダウンロードしたファイルからインストールを実行するには、次の手順に従います。
 - a. Java Studio Enterprise のインストーラファイル (*download-installer*) を、書き込み可能なディレクトリにダウンロードします。



注意 – ダウンロードディレクトリのパス名に空白またはその他の特殊文字を使用しないでください。

ダウンロードを正しく行うために、Sun Download Manager ソフトウェア (<http://www.sun.com/download/sdm/>) を使用してください。

注 – ダウンロードが完了したら、ダウンロードファイルを確認します。ダウンロードディレクトリで、ダウンロードしたファイルがダウンロードページに表示されているものと同じサイズであることを確認します。ファイルサイズが一致しない場合、そのファイルはダウンロード中に壊れた可能性があります。この場合、再度ダウンロードを行なってください。

- b. コマンドプロンプトから、ダウンロードしたファイルを実行可能ファイルにし、次のコマンドを使用してインストーラを起動します。

```
% chmod +x download-installer
% ./download-installer
```

download-installer は、ダウンロードしたファイル名に置き換えてください。

4. インストールウィザードの「ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
5. ライセンス許諾契約に同意して、「次へ」をクリックします。
6. 「インストールの種類」ページでは、次のいずれかを行います。

- 付属の Application Server をインストールする場合は、次の表を使用して、該当する選択と手順を実行します。

インストール対象	行うこと
すべてのコンポーネント	<ol style="list-style-type: none">1. 「標準」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。2. 「インストールディレクトリ」ページで、18ページの「付属の Application Server を含めたインストールを続行する」の手順に従います。
IDE と付属の Application Server (コラボレーション実行環境はインストールしない)	<ol style="list-style-type: none">1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。2. 「コンポーネントの選択」ページで、「コラボレーション実行環境」チェックボックスを選択解除します。3. 「次へ」をクリックします。4. 「インストールディレクトリ」ページで、18ページの「付属の Application Server を含めたインストールを続行する」の手順に従います。

- システムに、Java Studio Enterprise のこのインストールとともに使用する Sun Java™ System Application Server 8.2 Platform Edition がある場合は、次の表を使用して、該当する選択と手順を実行します。

インストール対象	行うこと
IDE とコラボレーション実行環境	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。 2. 「コンポーネントの選択」ページで、「Sun Java System Application Server 8.2 PE」チェックボックスを選択解除します。 3. 「次へ」をクリックします。 4. 「インストールディレクトリ」ページで、19ページの「インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する」の手順に従います。
IDE	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「カスタム」ラジオボタンを選択し、「次へ」をクリックします。 2. 「コンポーネントの選択」ページで、「Sun Java System Application Server 8.2 PE」および「コラボレーション実行環境」チェックボックスを選択解除します。 3. 「次へ」をクリックします。 4. 「インストールディレクトリ」ページで、19ページの「インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する」の手順に従います。

▼ 付属の Application Server を含めたインストールを続行する

1. インストールウィザードの「インストールディレクトリ」ページで、IDE および Application Server のデフォルトインストールディレクトリを受け入れるか、別のディレクトリを指定して「次へ」をクリックします。

注 – 指定するインストールディレクトリは、空でなければなりません。指定したディレクトリが存在しない場合は、インストール中に作成されます。選択したディレクトリに対する書き込み権限を持っていなければなりません。

Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition のインストールディレクトリでは、そのパス名に空白文字または特殊記号（「!」や「#」など）を含めることはできません。

2. 互換性のある JDK の自動検出に失敗する場合は、Java Studio Enterprise のこのインストールに使用する JDK を指定して、「次へ」をクリックします。

注 – JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、現在のインストールを取り消し、先に必要なバージョンの JDK をインストールしてください。2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。

3. Application Server のインストール用の admin ユーザー名とパスワードを定義するか、デフォルトを受け入れて、「次へ」をクリックします。

admin ユーザー名は英数字でなければなりません。パスワードは、最低 8 文字の長さであるべきです。デフォルトの名前は admin、パスワードは adminadmin です。

4. (省略可能) Application Server のデフォルトポート値を確認して、必要な場合は変更します。そのあと、「次へ」をクリックします。

このページは、インストールの種類として「カスタム」を選択した場合にだけ表示されます (たとえば、IDE と付属の Application Server をインストールし、コラボレーション実行環境はインストールしないというような場合)。

「標準」インストールの場合は、インストーラは自動的に Application Server のポートを検証し、ユーザーの操作は何も要求しません。

5. 20 ページの「インストールを完了する」の指示に従って、インストールを完了します。

▼ インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する

1. インストールウィザードの「インストールディレクトリ」ページで、IDE のデフォルトインストールディレクトリを受け入れるか、別のディレクトリを指定して「次へ」をクリックします。

注 – 指定するインストールディレクトリは、空でなければなりません。指定したディレクトリが存在しない場合は、インストール中に作成されます。選択したディレクトリに対する書き込み権限を持っていないければなりません。

2. 互換性のある JDK の一覧から、Java Studio Enterprise のこのインストールで使用する JDK を指定し、「次へ」をクリックします。

注 – JDK 5.0 Update 1 以上のバージョンがシステムにない場合は、現在のインストールを取り消し、先に必要なバージョンの JDK をインストールしてください。2 ページの「必要なソフトウェア」を参照してください。

3. 互換性のあるインストールのリストからインストール済みの Application Server を選択するか、「ブラウズ」をクリックして場所を指定し、「次へ」をクリックします。
インストール済みの Application Server を選択しないで先へ進むと、Java Studio Enterprise IDE は、この Application Server インストールを使用するための設定を行いません。インストール済みの Application Server 用に手動で IDE を設定する必要があります。
4. (省略可能) コラボレーション実行環境の設定ページで、コラボレーション実行環境用のポート値、サービス名、インスタンス名を指定するか、デフォルト値を受け入れます。
このページは、コラボレーション実行環境のインストールを選択した場合にだけ表示されます。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 20 ページの「インストールを完了する」の指示に従って、インストールを完了します。

▼ インストールを完了する

1. 現在の設定が正しいこと、システムに十分な空き容量があることを確認します。
2. 「インストール」をクリックし、インストールを開始します。
3. インストールが完了したあとに IDE を起動するには、「Java Studio Enterprise IDE を起動」チェックボックスを選択します。
4. 「完了」をクリックします。
インストールプログラムはインストール情報のログファイルを作成します。デフォルトでは、このログファイルは、次のディレクトリに保存されています。
Solaris OS プラットフォーム: `/var/tmp/jstudio_ent81-installation-timestamp.random-number.log`
Linux プラットフォーム: `/tmp/jstudio_ent81-installation-timestamp.random-number.log`
14 ページの「インストールログファイルの生成」の手順に従うと、ログファイルは、インストールの前に指定した場所にも保存されます。
5. ファイアウォールアプリケーションを停止している場合は、有効にします。

注 – Sun Java System Application Server 8.2 Platform Edition またはコラボレーション実行環境をインストールしている場合は、サーバーのポート番号などの設定情報を次のファイルで確認できます。

`java-studio-install-dir/configuration-data.txt`

IDE の起動

起動スクリプトを実行して、IDE を起動します。

▼ IDE を起動する

1. IDE の実行可能ファイルがあるディレクトリに移動します。

例:

```
% cd java-studio-install-dir/ide/bin
```

2. 次のコマンドを使用して IDE を起動します。

```
% ./jstudio.sh
```

jstudio.sh コマンド行か、*java-studio-install-dir/ide/etc/jstudio.conf* ファイルでコマンドオプションを指定することができます。25 ページの「起動コマンド行オプションの使用」を参照してください。

第4章

Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ

IDE は、ユーザー固有のデータをユーザーディレクトリに格納します。ユーザー固有のデータとしては、IDE の設定やオプション、およびその他の必要な実行時データなどがあります。ユーザーディレクトリにはまた、技術サポートを受けるときに有用な情報を提供する `messages.log` ファイルも含まれます。`messages.log` ファイルは、`user-directory/var/log` ディレクトリにあります。

ユーザーディレクトリのデフォルトの場所は、次のとおりです。

- Microsoft Windows プラットフォームの場合:
`%SystemDrive%\Documents and Settings\user-ID\.jstudio\Ent81`
- Solaris OS プラットフォームの場合:
`$HOME/.jstudio/Ent81`
- Linux プラットフォームの場合:
`$HOME/.jstudio/Ent81`

コマンド行で `--userdir` コマンド行オプションを付けて IDE を起動することによって、ユーザーディレクトリの場所を指定することができます。詳細は、25 ページの「起動コマンド行オプションの使用」を参照してください。

起動コマンド行オプションの使用

追加のコマンド行オプションを使用して、IDE 実行可能ファイルを起動できます。

オプションは、次の方法で利用できます。

- コマンド行でオプションを入力する。
- `java-studio-install-dir/ide/etc/jstudio.conf` ファイルにオプションを入力する。

IDE は、コマンド行オプションを解析する前に `jstudio.conf` ファイルを読み取ります。`jstudio.conf` ファイルでは、複数行にオプションを入力することができます。

次の表に、`jstudio` コマンド行オプションの一覧を示します。

表 5-1 IDE の起動オプション

オプション	説明
<code>--help</code> または <code>-h</code>	使用可能なオプションとその使用法を出力します。
<code>--jdkhome <i>jdk-home-dir</i></code>	インストール中に指定したデフォルト以外の J2SE プラットフォームの場所を指定します。
<code>--cp:p <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスの前に指定されたクラスパスを追加します。
<code>--cp:a <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスのあとに指定されたクラスパスを追加します。
<code>--userdir <i>IDE-user-dir</i></code>	<code>IDE-user-dir</code> (ユーザー設定がある場所) を指定します。 このオプションを指定されていない場合は、デフォルトの場所が使用されます。23 ページの「Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ」を参照してください。

表 5-1 IDE の起動オプション (続き)

オプション	説明
<code>-Jjvm-flag</code>	<p>Java™ 仮想マシン (JVM™) ソフトウェアに指定されたフラグを直接渡します。</p> <p><code>-J-Xverify:none</code> は、バイトコードの妥当性を検査しないよう JVM ソフトウェアに指示します。これによって、起動時間が短縮されます。このフラグを設定すると、Java 言語が提供する保護の一部が行われなくなります。詳細は、JVM ソフトウェアのマニュアルを参照してください。</p> <p><code>-J-Xms24m</code> は、JVM ソフトウェアの初期ヒープサイズを 24M バイトに設定します。このフラグによって、JVM ソフトウェアが起動中にヒープサイズを拡張することがなくなり、起動時間が短縮されます。</p> <p><code>-J-Xmx96m</code> は、JVM ソフトウェアの最大ヒープサイズを 96M バイトに設定します。</p> <p><code>-J -Xss1024k</code> は、スレッドスタックサイズを設定します。</p>
<code>--laf UI_class_name</code>	<p>指定された UI クラスを IDE の Look & Feel に設定します。以下に、2 つの Look & Feel クラス例を示します。 <code>com.sun.java.swing.plaf.motif.MotifLookAndFeel</code> と <code>javax.swing.plaf.metal.MetalLookAndFeel</code> です。</p>
<code>--fontsize size</code>	<p>IDE ユーザーインターフェースに使用するフォントサイズをポイント数で設定します。デフォルト値は 11 ポイントです。</p>

第6章

Java Studio Enterprise ソフトウェアのアンインストール

Java Studio Enterprise ソフトウェアには、自身を削除するためのアンインストーラが用意されています。

この章は、次の節で構成されています。

- 27 ページの「Microsoft Windows プラットフォームでのアンインストール」
 - 28 ページの「Solaris OS と Linux プラットフォームでのアンインストール」
-

Microsoft Windows プラットフォームでのアンインストール

アンインストールを行うには、Sun Java Studio Enterprise 8.1 アンインストーラを使用します。



注意 – Java Studio Enterprise ソフトウェアは、どのような場合でも、単にファイルを削除することによるアンインストールは行わないでください。アンインストーラを使用しないと、システムが壊れる危険性があります。

▼ ソフトウェアをアンインストールする

1. IDE を停止します。
2. コントロールパネルで「プログラムの追加と削除」を選択し、「Sun Java™ Studio Enterprise 8.1」を選択して「変更と削除」をクリックします。
3. アンインストーラの指示に従います。

4. アンインストールが完了したら、「完了」をクリックします。

プログラムはアンインストール情報のログファイルを作成します。このログファイル (`jstudio_ent81-uninstallation-timestamp.random-number.log`) は、次の場所に保存されています。

`%SystemDrive%\Documents and Settings\user-ID\Local Settings\Temp`

例: `C:\Documents and Settings\myUserName\Local Settings\Temp\jstudio_ent81-uninstallation-20060227171256.36051.log`

Solaris OS と Linux プラットフォームでのアンインストール

アンインストールを行うには、Sun Java Studio Enterprise 8.1 アンインストーラを使用します。



注意 – Java Studio Enterprise ソフトウェアは、どのような場合でも、単にファイルを削除することによるアンインストールは行わないでください。アンインストーラを使用しないと、システムが壊れる危険性があります。

▼ ソフトウェアをアンインストールする

1. IDE を停止します。
2. `java-studio-install-dir/bin/` ディレクトリに移動し、次のように入力してアンインストーラを起動します。

```
% ./uninstall.sh
```

アンインストーラが起動し、開始画面が表示されます。

3. 「次へ」をクリックし、アンインストーラの指示に従います。
4. アンインストールが完了したら、「閉じる」をクリックします。

Java Studio Enterprise ソフトウェアのアンインストールが成功すると、空の `java-studio-install-dir` ディレクトリが残ります。

このディレクトリにファイルが含まれている場合は、アドオン製品をインストールしていたか、アンインストールが不完全であった可能性があります。個別のコンポーネント製品をアンインストールした場合、その製品以外のインストールディレクトリはそのまま残ります。

第7章

サイレントモードでの Java Studio Enterprise ソフトウェア のインストール

サイレントインストールは、類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする場合に便利です。サイレントインストールを行うには、インストーラを1回実行し、「状態ファイル」に入力値を取り込む必要があります。状態ファイルには応答記録がパラメータの一覧として収容されており、それぞれが単一のプロンプトあるいはフィールドを示しています。この状態ファイルを編集してホスト別の値を設定し、入力として使用することによって、多数のホストでインストーラを実行することができます。そうすることによって、企業内の複数のホストにまたがって1つインストール構成を利用することができます。

注 – 状態ファイルを作成する前に、対話形式でインストールするのと同じ手順でインストールの準備を行います。詳細は、1ページの「Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールの準備」を参照してください。

この章は、次の節で構成されています。

- 29 ページの「サイレントモードの使用に関する注意事項」
- 30 ページの「状態ファイルの作成」
- 32 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」

サイレントモードの使用に関する注意事項

サイレントインストールに成功させるために、次の注意事項を守ってください。

- 30 ページの「状態ファイルの作成」で説明しているように、状態ファイルは、インストーラに生成させます。

状態ファイルを手動で作成しないでください。インストーラが生成した状態ファイルは、インストーラのリアルタイム依存関係検査やエラーレポートを使用しません。

- 変更する前に、状態ファイルの複製を作成してください。
- パラメータの値を編集する以外のパラメータの変更を行わないでください。
 - 値がなくてもパラメータを削除しないでください。
 - パラメータを追加しないでください。
 - 含まれているパラメータの順序を変更しないでください。
- 値を編集するときに元の型と形式をメモし、新しい値を入力する際はそれらの型と形式を維持してください。例:
 - 古い値がスラッシュで始まる場合は、必ず新しい値もスラッシュで始めます。
 - 元の値の英字の大文字と小文字の区別を維持します。

状態ファイルの作成

状態ファイルを作成するには、実際のインストールを禁止するコマンド行オプションを使用してインストーラを実行します。

▼ Microsoft Windows プラットフォームで状態ファイルを作成する

1. 管理者 (administrator) 権限でログインします。
2. コマンドプロンプトウィンドウで、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。
3. 状態ファイルの絶対パスを指定してインストーラを起動します。
インストーラコマンドの形式は次のとおりです。

```
install-launcher -options-record statefile
```

statefile 状態ファイルの絶対パスとファイル名を指定します。

例:

```
jstudio_ent81-ml-windows.exe -options-record C:\temp\  
SilentStateFile.txt
```

4. 5 ページの「Microsoft Windows: Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールと起動方法」の指示に従って、インストールを完了します。

インストーラに応答すると、状態ファイルに入力した値が記録されます。インストーラが完了すると、指定した場所に状態ファイルが生成されています。

▼ UNIX プラットフォームで状態ファイルを作成する

1. 端末ウィンドウで、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。
2. 状態ファイルの絶対パス名を指定してインストーラを起動します。
インストーラコマンドの形式は次のとおりです。

```
install-launcher -options-record statefile
```

*install-launcher*は、次のいずれかです。

- Solaris OS SPARC プラットフォーム:
jstudio_ent81-ml-solaris-sparc.sh
- Solaris OSx86 プラットフォーム: jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh
- Linux プラットフォーム: jstudio_ent81-ml-linux.sh

この場合の *statefile* には、状態ファイルの名前を指定します。

例:

```
jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh -options-record  
SilentStateFile.txt
```

3. 13 ページの「Solaris OS および Linux: Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストールと起動方法」の指示に従って、インストールを完了します。
インストーラに応答すると、状態ファイルに入力した値が記録されます。インストーラが完了すると、指定した場所に状態ファイルが生成されています。
4. (省略可能) 状態ファイルを編集して値を変更します。
詳細は、状態ファイルの情報を参照してください。

サイレントモードでのインストーラの実行

インストーラを実行するマシンの OS は、状態ファイルを作成したマシンと同じである必要があります。

▼ Microsoft Windows プラットフォームでサイレントインストールを実行する

1. Java Studio Enterprise をインストールするシステムに、必要なアクセス権でログインします。
2. インストーラのポート割り当てロジックで問題が起きるのを回避するために、デスクトップのファイアウォールソフトウェアを無効にします。
3. コマンドプロンプトウィンドウを開き、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。
4. 状態ファイルの絶対パス名を指定してサイレントインストーラを起動します。
サイレントインストーラコマンドの形式は次のとおりです。

```
jstudio_ent81-ml-windows.exe -options statefile -silent
```

statefile には、状態ファイルの絶対パスとファイル名を指定します。

例:

```
jstudio_ent81-ml-windows.exe -options C:\temp\  
SilentStateFile.txt -silent
```

▼ UNIX プラットフォームでサイレントインストールを実行する

1. Sun Java Studio Enterprise 8.1 をインストールするシステムに、必要なアクセス権でログインします。
2. 端末ウィンドウで、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。

3. 状態ファイルの名前を指定してサイレントインストーラを起動します。
サイレントインストーラコマンドの形式は次のとおりです。

```
install-launcher -options statefile -silent
```

*install-launcher*は、次のいずれかです。

- Solaris OS SPARC プラットフォーム:
jstudio_ent81-ml-solaris-sparc.sh
- Solaris OSx86 プラットフォーム: jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh
- Linux プラットフォーム: jstudio_ent81-ml-linux.sh

この場合の *statefile* には、状態ファイルの名前を指定します。

例:

```
jstudio_ent81-ml-solaris-x86.sh -options SilentStateFile.txt -  
silent
```


コラボレーション実行環境の使用

Java Studio Enterprise ソフトウェアには、共同作業を行うためのコラボレーションのための機能が含まれています。IDE でコラボレーション機能を有効にするためには、IDE のインストール時にコラボレーション実行環境をインストールし、コラボレーション実行環境を起動します。

注 – 開発者コラボレーション機能は、特定のポート上でサーバーとのコミュニケーションを必要とします。ファイアウォールを使用する場合、IDE からインスタントメッセージ (IM) サーバー のポートまでの送信トラフィックを必ず許可してください。

IDE は認証を必要とする HTTPS プロキシを使用せず、HTTP プロキシを使用して IM サーバーへの接続をサポートします。サーバーがコミュニケーションに使用すると予想されるポートを探すには、38 ページの「コラボレーション実行環境ポートの確認と変更」を参照してください。

この章は、次の節で構成されています。

- 35 ページの「コラボレーション実行環境の起動」
- 36 ページの「コラボレーション実行環境サービスの構成 (Microsoft Windows)」
- 37 ページの「コラボレーションのログオプションの変更」
- 38 ページの「コラボレーション実行環境の停止」
- 38 ページの「コラボレーション実行環境ポートの確認と変更」

コラボレーション実行環境の起動

コラボレーション実行環境は、Microsoft Windows の場合は「スタート」メニュー、Solaris OS の場合はコマンド行から起動できます。Microsoft Windows システムの場合、コラボレーション実行環境は、Microsoft Windows が再起動されたときに自動的

に起動するように設定されています。この設定は、Microsoft Windows のコントロールパネルを使用して変更できます。36 ページの「コラボレーション実行環境サービスの構成 (Microsoft Windows)」を参照してください。

▼ コラボレーション実行環境を起動する (Microsoft Windows プラットフォーム)

- 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 8.1」->「コラボレーション実行環境」->「コラボレーション実行環境の起動」を選択します。

▼ コラボレーション実行環境を起動する (Solaris OS とLinux プラットフォーム)

1. コラボレーション実行環境を root でインストールした場合は、root でログインする必要があります。
2. 実行可能ファイルが入っているインストールディレクトリに移動します。

```
% cd java-studio-install-dir/collab/bin
```

3. コラボレーション実行環境プロセスを起動します。

```
% ./xmppd start
```

コラボレーション実行環境サービスの構成 (Microsoft Windows)

コラボレーション実行環境は、Microsoft Windows サービスとしてインストールされます。デフォルトの設定では、Microsoft Windows システムが起動したときに自動的に起動します。

▼ コラボレーション実行環境サービスを構成する

1. コントロールパネルで「管理ツール」をダイアログを開き、「サービス」を開きます。
2. 「Collaboration Runtime Service」というラベルの付いたエントリを右クリックします。

これは、コラボレーション実行環境のデフォルトのサービス名です。

Java Studio Enterprise のインストールの際に、コラボレーション実行環境サービスに別の名前を指定した場合は、これとは異なることがあります。10 ページの「インストール済みの Application Server を使用するインストールを続行する」を参照してください。

3. コンテキストメニューから、プロパティを選択します。
4. 「プロパティ」ダイアログの「全般」タブで、ドロップダウンリストから「スタートアップの種類」を選択します。

デフォルトの設定では、コラボレーション実行環境は Windows を起動したときに自動的に起動します。

コラボレーションのログオプションの変更

▼ コラボレーションのログオプションを変更する

障害追跡のためにコラボレーション実行環境のデバッグログを有効にすることができます。

1. 次の場所からコラボレーション実行環境構成ファイルを探します。

```
java-studio-install-dir/collab/config/xmppd.conf
```

2. デバッグログを有効にするには、テキストエディタでこの構成ファイルを開き、`iim.log.iim_server.severity=DEBUG` を設定します。

ログファイル (`xmppd.log`) は、次の場所にあります。

```
java-studio-install-dir/collab/log/
```

コラボレーション実行環境の停止

▼ コラボレーション実行環境を停止する (Microsoft Windows プラットフォーム)

- 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 8.1」->「コラボレーション実行環境」->「コラボレーション実行環境の停止」を選択します。

▼ コラボレーション実行環境を停止する (Solaris OS および Linux プラットフォーム)

1. 実行可能ファイルが入っているインストールディレクトリに移動します。

```
% cd java-studio-install-dir/collab/bin
```

2. コラボレーション実行環境プロセスを停止します。

```
% ./xmppd stop
```

コラボレーション実行環境ポートの確認と変更

▼ コラボレーション実行環境ポートを確認および変更する

1. コラボレーション実行環境を停止します。

2. テキストエディタで `java-studio-install-dir/collab/config/xmppd.conf` ファイルを開きます。

`iim_server.port=` で始まる行がコラボレーション実行環境ポートです。

3. ポートの変更をするには `iim_server.port` 変数に新しい値を入力して、変更を保存します。

例:

```
iim_server.port=5225
```

4. **コラボレーション実行環境の起動**

コラボレーション実行環境が指定したポートで実行できます。

索引

I

IDE

- 起動 (Solaris OS および Linux), 21
- 起動 (Windows の場合), 12

IDE の開始

「IDE の起動」を参照

IDE の起動

- Solaris OS および Linux, 21
- Windows, 12
- コマンド行オプション、使用, 25

IDE の設定

- Look & Feel, 26
- フォントサイズ, 26

J

- Java Studio Enterprise 8 との共存, 3
- JDK、事前にインストールされた, 2

L

Linux

- IDE の起動, 21
- アンインストール, 28
- 一時ディレクトリの変更, 14
- インストール済みの Application Server を使用してインストール, 19
- インストールの開始, 15
- インストールの制限事項, 2, 13

サイレントインストーラの実行, 32

状態ファイルの作成, 31

付属の Application Server を含めてインストール, 18

Look & Feel、IDE の設定, 26

M

Microsoft Windows

「Windows」を参照

S

Solaris OS

- IDE の起動, 21
- アンインストール, 28
- 一時ディレクトリの変更, 14
- インストール済みの Application Server を使用してインストール, 19
- インストールの開始, 15
- インストールの制限事項, 2, 13
- サイレントインストーラの実行, 32
- 状態ファイルの作成, 31
- 付属の Application Server を含めてインストール, 18

W

Windows

- IDE の起動, 12
- アンインストール, 27
- 一時ディレクトリの変更, 6
- インストール済みの Application Server を使用してインストール, 10
- インストールの開始, 6
- インストールの制限事項, 2, 5
- サイレントインストーラの実行, 32
- 状態ファイルの作成, 30
- 付属の Application Server を含めてインストール, 9

あ

- アンインストール
 - Linux, 28
 - Solaris OS, 28
 - Windows, 27
- 警告 (Solaris OS と Linux), 28
- 警告 (Windows), 27

い

- インストール
 - Solaris OS および Linux, 15
 - インストール済みの Application Server を使用, 19
 - 付属の Application Server を含む, 18
 - Windows, 6
 - インストール済みの Application Server を使用, 10
 - 付属の Application Server を含む, 9
- インストールの制限事項
 - Solaris OS および Linux, 13
 - Windows, 5
- インストールパス、前提条件, 2

き

- 起動オプション, 25

く

- クラスパス、IDE の起動オプション, 25

こ

- コマンド行オプション、IDE の起動, 25
- コラボレーション実行環境
 - Windows サービスの構成, 36
 - 起動, 35
 - 構成ファイル, 37
 - デバッグ, 37
 - ポートの変更, 38
 - ログオプション, 37

さ

- サイレントインストーラ
 - 実行 (Solaris OS と Linux), 32
 - 実行 (Windows の場合), 32
- サイレントインストール
 - インストール前の作業, 29
 - 目的, 29
- サイレントモードの注意事項, 29
- 削除
 - 「アンインストール」を参照
- サポートされているプラットフォーム, 1

し

- システム要件, 1
- 事前にインストールされた JDK, 2
- 状態ファイル
 - 作成 (Solaris OS と Linux), 31
 - 作成 (Windows の場合), 30
 - 定義, 29

せ

- 制限事項、JDK のバージョン, 2
- 制限事項、インストールパス, 2
- 前提条件、インストールパス, 2

そ

ソフトウェアの要件, 2

ち

注意事項、サイレントモード, 29

て

ディレクトリ

IDE ユーザー, 25

インストール, 2

ダウンロード (Solaris OS), 16

ふ

フォントサイズ、IDE の設定, 26

プラットフォーム、サポートされている, 1

へ

変更、一時ディレクトリ

Solaris OS および Linux, 14

Windows, 6

ゆ

ユーザーディレクトリ

起動の指定, 25

場所, 23

よ

要件、システム, 1

要件、ソフトウェア, 2

ろ

ログファイル

messages.log, 23

